

[COMMUNION]

WEB: <http://www.nskk.org/tokyo/index.html>E-mail: comm.tko@nskkg.org

PHONE: 03-3433-0987

FAX: 03-3433-8678

Diocese Office



《東京教区組織成立100周年特集①》

高橋主教特別インタビュー

これからの100年に向けて

東京教区は1923年に独立してから今年で組織成立100周年を迎えます。この記念すべき年に、今度は北関東教区との新教区設立・宣教協働という転換点を迎え、新たな課題が与えられました。コミュニオンでは高橋主教にこれからの東京教区、特に教会の宣教を中心にお話しをお伺いしました。

―まず、お聞きします。東京教区組織成立100周年を記念して何か行事などをお考えですか

主教：以前は毎年のように教区フェスティバルをしており、その集まりも楽しく意味のある行事だと思えますが、この度はその日一日だけ集まって「楽しかった」で終わらずとも、むしろ組織成立100周年をこれからの100年に向けての出発点という位置づけで捉えたいと思っています。毎日が教区創立の時と考え、日々新たに大切なものが生み出されることも大切にしたいと思えます。―具体的には何もしないのでしょうか

主教：新型コロナウィルス感染症は徐々に落ち着いてきたようにも思えますが、完全に収まったわけではないので気

は抜けませんが、礼拝は大事なものですので、時期は、ずれるかも知れませんが、何らかの形で皆さんとお捧げしたいと思っています。



―2月に100周年のお祈りを「教区ニュース」と一緒に送りましたが、例えばカードにでもして一人ひとりに配り、日々祈りの内に覚えていただければいいと思います。皆が日々の祈りの中で覚えることが大切であり、これからの繋がっていくのではないのでしょうか。

また、先の90周年の時に冊子を出しましたが、記録のためにも何か残す必要はあると思っています。―この100年の東京教区の

宣教を観て、良かったと思う点がありますか

主教：良い点はと言うか、素晴らしいことは、教会が時代にそってその都度新しい課題に向き合おうとしていることです。直近のことでは例えば東京諸聖徒教会の新しい事業（P8参照）や、子ども食堂、フードパントリー等々、それ以外の活動も含めて大切、且つ必要のないものに仕える働きだと思っています。

―では逆に、ここは足りなかったのではないか、またははつきり失敗だったという点などはあるでしょうか

主教：足りないとか失敗という発想はもったいない気がしますが、やはり教会も世俗化の波に押されていることとはあるかと思えます。自らへの戒めということでは、祈りや黙想にもっと時間を費やさねばと思えます。誰しも「あの時あすれば良かった」ということはあるでしょうが、特に神さまの意に反したのであれば、間違っていたとは言えないと思います。ただ、何が神様の意であるかの識別

や見極めは非常に難しいですが…。一方で、戦争がらみのことや差別問題など良かったでは済まされない問題もあります。その点はしっかりと歴史をみて学び、悔い改めやしっかりと方向性を示すことは大切です。

―教会の切実な問題として最近の信徒の減少があります。その原因はどこにあると思われませんか

主教：信徒の減少は日本だけでなく、世界的な問題にもなっています。誰の責任とかではなく、キリスト教に魅力が感じられなくなったからかもしれないませんが、では人びとの心に染み入る魅力とはとなると難しいですし、何でも気に入られることも異なると思います。

戦後であれば、教会に行けば食べ物などを貰える所という風潮があったと聞いたことがあります。楽しい集まりを提供する場でもあったようですが、今は魅力ある楽しいことが世の中にあふれている中で、信仰的魅力とは何かというのを考えます。このような世俗化の中で、さらにコロナが追い打ちをかけ、私たちは多くを失い意気消沈している状況です。でもこの状況は

大きなチャンスでもあると思います。
―それはどうしてでしょう

主教…そのことによって人々は本当に大事なもので、なくてはならないものに気が始めていますし、いのちへの関心、洞察、畏敬の念も増しているかとも思えます。また、クリスマス自身、信仰や霊性というものを問い直したり、見つめたり、改めて深め始めているように思えます。

―そのような人々にキリスト教が届けば共鳴してもらえるとということですね
主教…そうですね、そして私たちも自分の信仰を見直すチャンスになったと思っています。

―それがこれからの教会を考える上で大切なことかもしれません。それを踏まえてこれから私たちはどのようにに宣教に取り組みたいのでしょうか

主教…宣教という言葉は巡っては、実に多くの理解、感想、イメージがあると思います。単純にどれが正解、間違いとは言えませんが、「神様からのいのち」に仕え合う、支え合うということを根底に、教会がその働きをしていく、何か劇的なプログラムではなくても、「神様の、神様からのいのち」に仕える働きを地道にしていって、何か宣教に繋がる、宣教そのものと言ってもよいのではないのでしょうか。

―そのために必要なことはなんですか

主教…教会の周辺にいる人に目を向けよく見ること、聴くことです。限られ

た枠の中だけで考えていても限界があるのではないのでしょうか。

―この先の100年に向けての大きな変化として現在、北関東教会との新設・協働が進められています。信徒の関心はあまり高くないように感じます。これによって私たちはどう変わるのでしょうか

主教…具体的にどう変わるかというより、北関東の教会を巡回して思うのですが、一つの共同体になることによつて教会の色が増える、稚拙な例ですが、例えば今まで5色の絵の具で描いていた絵が10色で描けるようになる、仲間が増えることは特色も増すことであり、より豊かな共同体になるということです。

日本聖公会の教区を見直すというのは、半世紀も前からある議論ですが、ともすると総論賛成各論反対で終わってしまったというのを先輩聖職から聞いたことがあります。これ以上先延ばしにすることがこの先の聖公会にとつてどうなのかとは思いますが。現在の教区分けは宣教師たちによるところが大きいようですが、日本独自の宣教論は大事であるとともに、そのために旧態依然ではなく、神さまによりよく仕えるために変わっていくのもいいのではないのでしょうか。そして、変わる事とは基本、原点に返ることとも無縁ではないと思います。

―確かに日本に11の教区は多いかもしれませんが、牧師の数に対して教会の

数が多いという問題の方が切実です。それについてのお考えはありますか

主教…教会の数が多から合併して数を減らすという考えには簡単に首を縦に振るわけにはいきません。特に地方に行くとき近くの教会といつてもかなり離れていますので、教会がなくなると信仰の中心である礼拝が守れなくなる信徒がでますから。

―それよりも自分たちの教会が今まで大事にしてきたことは何か、自分たちの教会の賜物、豊かな働きはこれだというものの見直しや再発見をしてほしいと思います。必ず見えてくるものがあるはずですよ。

―その視点は重要だと思えます。ただ合併は難しいとしても教会同士の協働をもっと考えてもいいのではないのでしょうか

主教…かつては一教会一牧師が当たり前のようになっていましたが、現在のようになり一人がいくつかの教会を管理する状況で、やはり教会同士の協働は大切になってきています。「チームミニストリー」の形成も重要になってくると思えます。摩擦が起きることもあるでしょうが、違うもの同士が出合うことで新しい何かが生まれることに期待します。それが一つの突破口になれば、教会の新しいミッションが見えてくるかもしれません。

―協働することによって教会のイメージがぐっと広がるわけですね

主教…自分たちの教会のイメージが固くなっていたり、固定化していたりす

るような気もします。時に、自分がクリスチャンではなく、外から教会を視たら何が、どう見えるかという視点も大切かもしれません。

―11月に宣教協議会があります。課題も多いと思いますが、一審期待していることは何でしょうか

主教…大事なものはその場だけの話し合いで終わらずに、出された課題を持ち帰って教区が取り組むその始まりとすることです。

ランベス会議でも出ましたがイエスの弟子を増やすという発想、弟子といつてもペテロやパウロといった凄いと想像しがちな人たちということではなく、一人ひとりがその自覚と喜びをもち世に仕えていく、地域に仕えていく、そのためのヒントが与えられれば有り難いと思います。

―最後に根本的な質問になりますが、多くの宗教、キリスト教の宗派がある中で聖公会の持っている一番の良さみたいなのはどこにあると思われませんか

主教…よく言われるのが聖公会のキーワードは「多様性の一致」です。そこが聖公会の一番の特色でしたが、昨年のランベス会議に出席して多様性とは、一致とは何だろうと考えさせられました。

報道もされましたが、この会議をボイコットした主教もいましたし、聖餐式で陪餐を拒否された主教もいました。色々な考え方や神学、霊性などがある中で、多様性とは何だろうと考え

させられました。右から左という幅広い考え方が有りながら、何でも有りとは違う、それでいて一致するとは何だろ…すぐに答は出せませんが考え続けたいと思います。

―多様性の一致という聖公会の良さが揺らいでいるという気がします

主教…でも、そこで思うのがイエスの弟子たちはどうだったのかということ。頼りがいのある人もいれば、血の気の多い人もいる、臆病なものもいれば、疑り深い人もいる、ペテロとパウロにしても考え方は違っていただけで、それでもイエスを伝えることでは一致していた。この問題乗り越えていくためにも祈り続けたいと思います。そして、何よりも大切なものは礼拝ですし、祈りの共同体としての日々の成長、深まりを祈り続けたいと思います。

―イエスの弟子選び自体が多様性のメッセージにもなっているわけですね
 主教…その異質というか私たちと違うものをどう受け入れ合えるか、難しいことですが、そこがやはり信仰のなせる業であり、信仰の素晴らしさと厳しさでもあるわけです。

―その原点に立ち返れば、教区の協働も、教会の協働も多くの課題を乗り越えられると思います。今日はいろいろとお話をいただきどうも有り難うございました

2月28日 主教室にて
 聞き手…広報委員

《日本聖公会アーカイブ》
東京教区100年の歴史より①

第14総会 東京教区設置の件

「東京、大阪両市の諸教会は着々教区新設の準備を進めたが、大正11年5月24日に東京教区設置申請書が教務院（現管区）に提出され、大阪でもこれにならったので、6月1日に開かれた教務院総会では(1)東京、大阪両教区設置推薦の件(2)監督（主教）選挙に関する細則」が議決された。引続いて東西で教区設置準備会が幾度か開かれて準備が整えられた。1923年（大正12年）4月25日から28日にわたって第14総会が東京聖三一教会で開かれた。この総会第2日（26日）に東京教区設置の件が異議なく可決され、大阪教区は大教区制を主張する代議員の反対があったが、第3日に教区設置が可決された。こうして我が聖公会は宣教64年をもってここに始めて邦人主教によって統治される主教教区を有することになったのである。」

（松平惟太郎著、日本聖公会歴史編纂委員会編「日本聖公会百年史」155頁）

東京教区初代監督（主教）元田作之進師の按手式

東京教区監督按手式は、12月7日午前10時より、本郷聖テモテ教会聖堂に於て、最も荘厳に挙行された。同日午前9時より同教会高瀬牧師司式にて早禱式



監督按手式当日の本郷聖テモテ教会

る仮ベストリー天幕より、十字架奉持者を先頭に東京教区常置委員これに次ぎ、既報順序に従い、司式者マキム監督を殿としたる白衣礼装の長き行列は繰出し、表玄関にかかると、堂内にて聖歌うたわれ、其間に行列は肅々行進してチャンセル設けの席に着き、かくて既定の式は始まり、滞りなく進行して米国聖公会教務院長神学博士監督グラード氏の説教となった。（略）やがて当選監督は奏楽中に礼服残部を着し跪き司会監督と会衆は交互に、聖霊を求むる歌を歌い司会監督及び臨席監督の按手となるや、満堂肅として敬虔の気は漂い、其の荘厳なる光景は、参列者に終生忘るることの出来ぬ印象を与えた。式は聖餐式に移り教区教役者のみ陪餐し、聖歌団の聖歌ありて、ここに全く了り、前記順序の行列にてチャンセル内の教職諸士は退堂し、会衆静かに退堂散会したのは12時退きであった。（略）

行われ、それが済んで愈々按手式定刻となるや、聖堂裏手空地に設けられた

（基督教週報第48巻第26号 大正12年12月14日発行）

自らを疑いつつ、

ただ主に信頼して歩みたい

聖職候補生 福永澄

このたび聖公会神学院での3年間の学びを終え、4月より聖パトリック教会での勤務が始まります。この3年間の学びの時を過ごせたことを、神様とお支えくださった皆さまに感謝いたします。

思い返せば新型コロナウイルス感染症の感染が拡大して緊急事態宣言が出され、東京教区でも公禱が休止されていました。2度にわたって入学式が延期され、入学式前に授業が開始されるという、異例のスタートとなった神学生生活でした。非常勤講師の先生方の講義

はリモートで行われ、日常生活においても外出を制限され、主日実習も夏期の施設実習も行えないという状況にとまどうばかりでした。また、還暦を目前にして新しいことを学ぶということは、記憶力を含めて想像していた以上の困難が伴いました。こうした不安な状況にあつて、皆さまがお祈りを以ってお支えくださったことは、私にとって大きな力となりました。



教会のために働きたい」という自らの思いを疑い続け、自らに問い続けていくのだろう、自らの召命感に自信を持つことは無いのだろうと思つています。

今はただ「恐れることはない、わたしはあなたと共にいる神。たじろぐな、わたしはあなたの神。勢いを与えてあなたを助けわたしの救いの右の手であなたを支える。」というイザヤ書41章10節のみ言葉を胸に、主に信頼を寄せて歩んでいきたいと思つています。今後ともお祈りをもつてお支えくださいますよう、よろしくお願いたします。

【禁の二冊】

聞く技術 聞いてもらう技術

東畑開人著

ちくま新書2022年刊

執事 荻原充

私たちは、話すこと、伝えることに熱心であろうとしているかもしれせん。しかし、日々接する家族や友人、共に働く仲間の話を、また教会で互いの話をきちんと聞いているといえるでしょうか。ヘンリ・ナウエンは、聴くことは「霊的もてなし」であり、話を聴いて貰うことによつて人は受け入れられたと感じる、とい

います。この本は、あた

らめて「聞く・聴く」ということを考えるときを与えてくれます。タイトルには「技術」とあり、内容にも「技術の小手先編」という章があるので、「なんだ、ハウツーパーカ」と思われるかもしれ

ません。しかし著者の東畑開人も、今われわれの生きる社会に最も欠けているのは「聞く」ことではないかと指摘しており、どうしたら聞くことができるのか、という問いを持つてこの本を書いています。東畑は、「聞く」は語られてい



ることを言葉通り受け止めることと、「聴く」は語られていることの裏にある気持ちに触れることと定義しています。そして、心の奥底に触れるよりも、懸命に訴えられていることをそのまま受け止める「聞く」ほうが難しい、また聞いてほしいという訴えは、言っていることをちゃんと聞いてほしいという願いなのだ、と語ります。わたしの心に留まったのは、「話が聞けないのは、あなたの話を聞いて貰っていないから」という指摘です。「心が追い詰められ、脅かされているときには、僕らは人の話を聞けません。ですから、聞いてもらう必要がある」と東畑は言います。聞くためには、まず聞いてもらう。聞いて貰ったという経験を持つ者が、聞くことができるのです。私たちは、誰かにちゃんと聞いて貰ったという経験があるでしょうか。心が追い詰められているとき、話を安心して聞いて貰える人がいるでしょうか。神に聞いていたたく祈りの時間を持つていてい

るか。

第2回北関東教区・東京教区 新教区設立説明懇談会報告

司祭 太田 信三

2月11日(土) 13時から聖アンデレ主教座聖堂にて、教役者、教区会信徒代議員対象に掲題の会合が開催された。北関東教区では同日、『教会を語る会』が志木聖母教会にて開催されており、16時からオンラインで両会場をつなぎ、オンラインではあるものの最初の「合同礼拝」をささげることができた。参加者の感想にもあったが、この礼拝は、この日のハイライトであった。

本会合を企画した北関東教区・東京教区宣教協働特別委員会東京教区メンバーでは、三つのことを今回の目的とした。

一つは、高橋宏幸主教の強い思いを分かち合うこと。それは当日、高橋主教による開会挨拶での「わたしたち二つの教区がパイオニアになる」という言葉に表れていたように感じられた。パイオニアになるとは、管区全体の再編成にはじめに乗り出すとも取れる言葉だが、高橋主教としては、神の栄光、働きへの参与のために動き出す者でありたい、ということであった。挨拶ではさらに、この歩みが神のみ心ならば人が止める

ことはできないものであり、たとえ不可能に思えても、1%でも「できる」という可能性があるなら歩みを進めていきたい、という思いが分かち合われた。

二つ目の目的は、事実を基にわたしたちの現状を直視しようということであった。これは、高橋主教による開会挨拶での、「新教区設立の道のりは、現状の課題を直視しなければならぬ厳しい道のりだが、一人ではなく皆で歩むことができるなら、苦しみから喜びへ変えられていくはずである。」というメッセージと呼応するテーマであった。そのために、特別委員会メンバーである奥山尚財政委員長から、『新教区発足に向けた課題(中間報告)―財政的な面を中心に―』と題して、両教区の信徒・教役者数、財政面等についての現況報告、中・長期シミュレーション、さらには新教区発足に向けての財政面での課題が分かち合われた。(教区HPに当日資料掲載)

三つ目の目的は、参加者一人ひとりが声を発する場にした、ということであった。そのために、教会グループをベースに8グループに分かれ、グループワークが行われた。「北関東教区と新教区を設立することになった。」という仮定を前提に、「北

関東教区と共に担える働きはなにか。どのようなことができるようになるのか。どのような教区になったら嬉しいか。」ということについて語り合った。

新教区設立により、先に提示された課題の何もかもが解決することはない。けれどもこの歩みにより、わたしたちには確実に変化が起こるはずだ。今後より一層、感情や時間、空間を皆で分かち合いながら、この歩みが進んでいくことを願っている。(北関東教区・東京教区宣教協働特別委員会委員)

宣教協働のために

渡辺 定夫

昨年9月に続く第2回は、まず奥山財政委員長から両教区の基本的なデータについて説明があった。これは信徒にとって協働を理解するためには基本的なことだ。現在、当日配布された資料がホームページで閲覧できるのは有難く、財政担当者に感謝したい。その後、8グループに分れ「両教区が共に新教区を作るためにどのような教区になれば良いのか」との前提で話し合うことになった。

私がいた下町グループA(9名)では、ポジティブ視点とネガティブ

視点から意見を出し合い、50以上の意見が飛び交った。内容はポジティブの方が多かったが、そこから自由な話し合いが進むと、やはりネガティブ意見も出てくる。その場の空気が何と進めたいかの思いが強いと感じたが、そんなに簡単ではないとの思いもある。

出席した者として自分の教会で「教区合同」の話をしても、なかなか身近なこととは感じていただけない。「それは教区の上の方の話でしょ。」と言われても仕方がない。

ほとんどの牧師が教会を複数担当している状況では、まずメリットがあるのかを考える。

グループでは、今の教会に魅力が無いという声を聞く、との発言があった。今、牧師が信徒一人一人と向き合う時間があるのか。信徒と牧師と一緒に、ダイナミックに活動しているのか。実のところ、信徒は教区のことよりも自分の教会の明日のことです。手一杯というのが本音ではないか。今後合同のメリットが分れば先に進めるし、財務など具体的な数字を提示していただき、メリットも含めて理解が進めば、信徒が自分のこととして受け止められよう。主教と教役者と信徒とで将来像を創っていき

たい。(神愛教会信徒代議員)

カルト問題とどう向き合うか！ 統一協会問題をキリスト者として考える

司祭 卓 志雄

東京教区正義と平和協議会主催の「カルト問題とどう向き合うか！統一協会問題をキリスト者として考える」が1月21日（土）東京教区事務所とオンライン併用で開催され約45名の方々が参加された。私は今回の講師として「世界平和統一家庭連合（旧世界基督教統一神霊協会。以下、「統一協会」と称す）」を始めとするカルト問題から教会はどのように正義と平和を守っていくのかについて、参加者の皆さんと共に考える時間を分かち合った。

私がカルト問題に取り組むことになったきっかけは、カルト集団の信者によって殺害された父のことである。現在は日本聖公会管区事務所の宣教主事として、カルト問題に取り組んでいる他教派・市民団体との窓口を担っており、また日本聖公会の内部に対する注意喚起を行っている。

統一協会は1954年韓国で生まれたカルト集団である。統一協会の教理を記す『原理講論』によると、「創世記の蛇とエバの性犯罪により人類は墮落し血が汚れてしまった。イエスは救いの働きに失敗し、人類の汚れを清くし救いをもたらすために再

臨メシアである文鮮明が韓国に生まれた。」という。

日本には1958年に初めの宣教師が派遣され、1964年日本で宗教学者の認可を受けた。1968年には、関連組織である反共産主義政治団体「国際勝共連合」が設立され、反共産主義という政治的立場の一致から、安倍晋

三元首相の祖父である岸信介元首相からも協力した。その後も統一協会は政界へ積極的に浸透しようとし、実際に自民党保守議員からの庇護を受け、勢力を拡散していった。

1980年代以降は霊感商法が社会問題になった。姓名判断や手相鑑定を入り口と

して崇りや因縁を説き、韓国から輸入された高麗人参や高額な壺、印鑑、大理石などを法外な値段で売るといった訪問販売の手法である。また430代まで遡った先祖の罪を許す解怨式を名目に、韓国では1万8000円相当だが日本では140万から1億円で経典を



売り付けるなどして活動や聖地建設などの資金とし、全国霊感商法対策弁護士連絡会の統計によると1987年から2021年までの34年間で、相談件数3万4500件、被害額は1237億円に上った。その他にも偽名勧誘やマインドコントロール問題など、多くの民事訴訟が起きている。

また統一協会の主張では、日本は韓国を植民地支配する罪を犯したエバ国家でサタンの国、アダム国家韓国との和解のために韓国側に金銭をささげ、忠誠を尽くすことで罪が許される。合同結婚式を通して韓国で暮らしている日本人女性は7000人とも言われており、嫁不足の韓国農村部に入った女性もいる。そして安倍元首

相銃撃事件の後、山上被告の犯行動機が明らかになって、幼少期の子どもの宗教的虐待の実態や、その影響で成人後も苦しんでいるいわゆる宗教2世の存在が注目されるようになった。

カルト集団の横暴により神にかたどって造られた人間の尊厳 (Imago Dei)

が抑圧され、悲しみと苦しみを余儀なくされている多くの人々が存在している。山上被告のように凶行に走ることはないが、親が多額な献金をすることによる家庭の困窮や、組織的な信仰の強要とそれに伴う様々な人権侵害によって、絶え間なく苦しんでいる「宗教2世」の人々、合同結婚式によって日本から韓国に渡り厳しい生活を余儀なくされている女性たち、統一協会によって家族が引き裂かれ苦しんでいる人々、統一協会を脱会後未だに苦しみの只中にある人々：これらの人々の苦しみに向き合い、その回復のための働きを教会が担っていかなければならない。

こういう時こそ教会は、カルト集団によって被害を受けている人々を見て見ぬふりしてきたことに対する反省と共に、彼らの孤独、不安、絶望、叫びに寄り添うべきである。また未だ苦しみの只中にある人々の涙を神がぬぐいとつてくださり、神が癒しと回復の力を与えてくださることを共に確認することを疎かにしてはならない。カルト集団によって被害者となってしまった人々に対するケア（救出）は「するかしないか」の問題ではない。「どのようにするのか」の問題である。教会の宣教における先決課題はここにある。

（日本聖公会管区事務所宣教主事
インマヌエル新生教会牧師）



宣教協議会 ～清里への道～

今年の11月10日(金)～13日(月)に山梨県清里にある清泉寮で開催される「日本聖公会宣教協議会」には各教区から教区主教、宣教担当を含めて8名、そして日本聖公会

総会で定められた各委員会などの諸部門の代表、そして実行委員が集まる予定です。そして、協議会のプログラムの多くはオンライン配信を予定しており、実際に清里に集まるメンバーだけではなく日本聖公会につながる皆さんと一緒に時間を共有し、今後の日本聖公会の歩みについて思いを深め、共に歩み出していきたいと願っています。

各教区からの参加者、各委員会などの諸部門からの参加者が決まりつつありますが、参加者を対象とした「宣教協議会参加者オリエンテーション」を4月23日(日)と4月27日(木)の2回に分けてオンラインで行う予定です。今年の秋に清里に集まるまで、

まだ半年以上ありますが、すでに宣教協議会は始まっています。参加される方ができる限り情報を共有し、清里での宣教協議会までそれぞれの教区や諸部門で準備をして頂き、気持ちを醸成しながら「清里への道」を歩みながら準備をしていきたいと思っています。

参加される方の中には、また参加されない方も「宣教協議会って何を協議するのだろうか」「清里に集まって何をやるの?」という思いを抱かれています。

オリエンテーションでは、その疑問について丁寧に分かち合う予定です。前回のぶどうの枝だよりで実行委員長の磯主教様が「聖公会は神の国に向かって歩む旅人であり、正に私たちは今、希望を持って神の国へ歩む旅人としてこの宣教協議会を目指しています。その旅はこれからのための旅です。」と仰っておられます。宣教とは、神様が主体となって成される神の国の完成を目指す絶え間ない働きで

あり、私たちはその働きに招かれていきます。そして、その招きに応えて神の国を目指す旅をしています。神の国のしるしは、この世界の中にあることです。それに気づき、発見することによって私たちの心が開かれ、育てられていくことを願って協議会が行われます。

日本聖公会の今後の歩みを考えるすべてのプロセスは神の国を目指す旅であり、祝福されていることを皆さんと分かち合いたいと思います。協議会が私たちにとって希望となり、神様からの祝福を感じられる機会となり、私たち一人一人が元気になりたいですね。そしてその「元気」を一人でも多くの方々と分かち合っていきたいと思っています。

旅には喜びも沢山ありますが、苦難もたくさんあります。その苦難を乗り越えて旅を続けていくためには希望が必要です。宣教協議会の主



宣教協議会ホームページ



磯主教メッセージ

題聖句は、「私はぶどうの木、あなたがたはその枝である。人が私につながっており、私もその人につながっていれば、その人は豊かに実を結ぶ。私を離れては、あなたがたは何もできないからである。」(ヨハネ15:5)です。神の国を目指す旅は、イエス様を離れては続けられません。どうぞ、私たちがイエス様から離れずに旅を続けていくことが出来ますようにお祈りします。「清里への道」が祝福されますように。

◎宣教協議会実行委員長 磯晴久主教より「宣教協議会への招き」のメッセージがYouTubeで配信されています。どうぞ、ご覧ください。「2023日本聖公会宣教協議会ブログ」と検索し「各教区教区報第6号」のページから、またはQRコードから見ることが出来ます。

《信徒リレーエッセイ》

時代と共に姿は変わり

聖救主教会

宮本 恭子

今年で、設立して45年となる教会の「キッドスクール」は、材木問屋が並ぶ深川の地で始まった「深川勤労青少年センター」がルーツです。地方から集団就職した若者たちの集う場でした。10年後、材木問屋が木場に移転した後、「まこと地域センター」と名が変わり、地域のお年寄りや子供たちの集う場になりました。

子どもの施設として「キッドスクール」が誕生。働く女性の為に「まこと保育園」が設立され、保育園を巣立った子のために「ライト学童クラブ」が誕生。お年寄り子どもが共に過ごせる場が欲しいと、「深川愛の園」が生まれました。

そして、2025年には、「まこと保育園」が「こども園」に変わり、「キッドスクール」は、その中に吸収されます。これからは、社会福祉法人の中で、神様の愛を、ここに集う人々に、伝え続けます。

東京諸聖徒教会

「子ども」の家開設

思いをつなぐ 学童保育

樽谷 雪

2023年4月、東京諸聖徒教会の新しい宣教体制の一つ、学童保育がいよいよ開設します。

奇しくも、長年地域に愛され、惜しまれつつも閉園した「諸聖徒幼稚園」の開設から、今年でちょうど90年。再び子どもたちの声が響き渡ることとなったのは、この上ない喜びです。

今回開設するのは、当初目指していた100%民間の学童ではなく、公設民営の学童（区が設置し民間のライト学童クラブが運営）で、文京区では公設の学童を育成室と呼ぶため、名称も「林町育成室」に決まりました。

学童保育開設に向けて具体的に動き出したのは、コロナ元年の2020年1月、前年に立ち上げた、東京諸聖徒教会と東京聖テモテ教会のワーキンググループ「ぶんきょういもづーる」のメンバーで、話し合いだけでなく何が出来るか現場を見に行こう、と聖教主福祉会

を訪れたことから始まりです。そこでライト学童と出会うわけですが、あの時は自分の教会に学童保育を開設するなんて、届かぬ夢だろうと思っていました。しかし、芋づる式に様々なご縁に恵まれ（聖霊の働きとも！）、ようやく開設を迎えることができたのです。



0歳から14歳までの年少人口が、人口のおよそ13%弱（文京区統計令和5年1月）と、子育て世代の人口が増加傾向にある文京区。保育施設はこの10年で急増しましたが、学童が足りないのが現状です。地域の子どもたちのために幼稚園を作った先人たちに倣

い、90年後の私たちが地域に必要とされる学童を開設することは、偶然ではなく必然と言えるでしょう。

建物ができて学童開設をしたことはゴールでは無く始まりなのです。学童の働きを通して、私たち教会はさらに成長し続けなくてはなりません。最後に、これまでご支援を賜った多くの方々に、心より感謝申し上げます。林町育成室は皆さまのご支援で実現した学童です。これからもどうぞ見守ってください！

子育て支援施設の建築について

羽深 幸夫

1930年の聖堂定礎以来、92年ぶりに本格的な建築着工となる「恵みの時」が今年与えられました。

都心近くの地にある学童保育等の子育て支援施設が、庭付き木造戸建て形式で新規開設されるケースは稀であり、今後関係方面から注目される存在となることでしょう。

旧園舎に設けられていた地下倉庫は壊さずにプランに活かされており、さらにステンドグラス入りの小窓や、レトロ感のある建具類なども再利用されることから、諸聖徒幼

稚園の記念となるワンポイントな演出が随所になされています。

コロナ禍とウッドショック（輸入木材不足による高騰）で先の見えない昨年1月下旬、礼拝堂を残して解体工事に入りました。最初の心配となったウッドショックへの対応ですが、運よく施工業者さんの木材仕入れルートが秋田県にあったことからコスト、納期ともに大きな影響を受けることなく済みました。

無事上棟式を迎えた9月16日、残暑の中、青空を背景に組み上げられた骨組みを見上げながら、ここまでの神様のお導きに深い感謝

を捧げました。

東京諸聖徒教会宣教史の「百年の計」と捉えているこの度の事業ですが、着工に至るまで、東京諸聖徒教会や東京聖テモテ教会はじめ、聖公会に関わる多方面の方々から頂いているご尽力、建築献金、そしてお祈りに、言い尽くし得ぬ感謝の気持ちでいっぱい

です。
3月18日、高橋主教様司式にて外濠教会グループの方々だけでなく、この計画をお支え下さった方々を迎え会館祝福式を行うことが出来ました。

次回、夏号
7月23日発行予定

ちょっと聖書、ときどきユーモア（五十五）

1. 音声認識で

スマホの音声認識で「汝の敵を愛せよ」の聖書箇所を調べようとして話したら、スマホに「南部の鉄器を愛せよ」と表示された

2. ささげもの

牧師「最終的に、私たちは自分自身を神の前にささげることが、本当のささげものになるのです」
信徒「そうですね、人は最終的に必ずそうなると思います」
牧師「どうしてそう思うんですか？」
信徒「だって火葬場で焼かれると、みんな“焼き尽くささげもの”になりますから」

3. 結婚相手は

信徒「君のお父さんは立派な牧師さんだけど、君も結婚するならお父さんみたいな人がいいのかい」
牧師の娘「私は、そう思っているんですけど、でも…」
信徒「でも…なんだい」
牧師の娘「でも、うちの母が“それだけは絶対やめなさい”って反対するんです」